HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	室町時代における政治秩序の形成と顕密・禅宗寺院の歴史的位置 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	髙鳥, 廉
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13398号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/74558
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Ren_Takatori_abstract.pdf (論文内容の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：**博士（文学）**　　氏名：　**髙　鳥　　廉**

学位論文題名

室町時代における政治秩序の形成と顕密・禅宗寺院の歴史的位置

本論文の観点と方法

本論文は、室町時代の日本社会において、将軍ないし室町殿（将軍家家長）、あるいは同家を頂点とする政治秩序がいかにして形成されたかについて解明しようとしたものである。

当時の寺院社会は、「第二の世俗社会」と言ってよいほど世俗社会の身分制的秩序を色濃く反映したものであった。本論文は、とくにこの点に注目し、足利将軍家と顕密寺院・禅宗寺院との関係に分析の重点を置く。具体的には、京都周辺の貴顕が構成した垂直的な身分的秩序に加え、都鄙にわたる水平的な政治・経済的ネットワークの分析を行なった。

従来、公武関係や宗教史などの分野ごとに研究が進められた結果、剔抉された事実は一面的な評価に止まってきた憾みを遺す。本論文は、そうした反省の上に立ち、諸分野を横断的・総合的に見ることで、より的確な歴史研究を目指すものである。

また、単に数量的な傾向のみを指摘する水準を乗り越えるべく、そこで起きた現象の由縁や背景、結果や影響などを緻密に解明する手法を貫いた。史料の正確な解釈に基礎を置き、質的な研究を重視する、実証史学の手法が遺憾なく発揮された論文だと言えよう。

本論文の内容

序章では、仏教史・寺院史研究の成果と課題とから論を起こし、とくに祈禱のありようや門跡・禅宗寺院等への入室・入院を正確に位置づけるべきことを提起する。近年、単純な公武対立史観は乗り越えられ、公武統一政権論が主流を占めつつあるが、そこからさらに跳躍するための工夫として、宗教上の人事や法事等に関する歴史的背景を、全体史的に復元する必要性を喚起する。これは、公武関係史や宗教史、対外関係史などの諸領域を横断し、物事を複眼的かつ総合的に見ていくことの重要性の謂にほかならない。

第一部では、高次な家格としての将軍家の「貴種」性に着目しながら、将軍家・室町殿が、門跡寺院とどのような関係をもっていたのかについて論じている。第一章では、将軍家の子弟や室町殿の猶子が顕密の門跡寺院に入室していく契機について本格的な検討を加えた。彼らの入室が「貴種」の払底状況の補填に役立つとともに、将軍家との擬制的親子関係が、家格秩序における将軍家の上昇を招いたという流れが明らかになった。第二章では、将軍家の庶流である足利満詮流がことごとく出家した事実に注目し、将軍家の庶流が同家内部において嫡流（室町殿）の低位にあることを可視化するモメントとしてはたらいたことを指摘した。またその一方で、公家・寺院社会全体においては室町殿との血縁が重視され、儀礼待遇が厚遇されていった事実を指摘した。第三章では、将軍家出身僧の儀礼待遇が「貴種」待遇であり、特に御連枝は当今御連枝と同等な存在として位置づけられていったことを解明した。この点は、将軍家が摂関家以下に比べ隔絶して高い地位にあったことを示す。それゆえ、近年人口に膾炙する「准摂関家」なる語で将軍家の家格を理解すべきではない、ということが主張された。補論では、比丘尼御所を素材に、室町殿が附弟選定・住持任免に関わった点に注目し、それが公武双方の良好な関係を維持する意味を有したことを指摘した。

第二部では、天皇・上皇および室町殿という上位権力間の身分秩序について考察している。第四章では、寺社で行なわれる祈禱の主宰権に着目し、義持・義教期における室町殿の政治的立場が、共通して北朝天皇家を輔弼する立場にあったことを明らかにした。とくに、これまで漠然とイメージされてきた義教と「北山殿」義満との類似性を史料に基づいて否定し、天皇の輔弼役としての義教像を明確に提示した点に、本章の新味がある。第五章では、これを踏まえ、義満が行なった祈禱の分析を通じて、「室町殿」義満が公武の祈禱に際し、後光厳院流北朝天皇家の権威を維持する立場で振る舞っていたことなどが解明された。

第三部では、室町幕府と禅宗寺院との関係について、大徳寺や将軍家の菩提所、五山派禅宗の人事に深い関わりをもつ蔭涼職に取材して考究した。第六章では、大徳寺が十刹に位置づけられた時期を再検討し、十刹化は義満期ではなく義持期になされたことを明確にした。また、山名時熙が義持に訴えて十刹位につけたことを指摘した。大徳寺の事例は、五山派以外の大寺院にとっても、幕府主導の官寺制度の存在が影響力をもっていたことを如実に示す。第七章では、二代将軍足利義詮の菩提所である嵯峨宝篋院が遅く八代義政の時代に成立した事情を検討する。その住持を務めた禅僧泰甫恵通を取り上げ、将軍家菩提所の求心性や、後援者たる細川京兆家の手足として活動する泰甫の姿を描き出した。第八章では、五山派禅宗の人事に深く関与した蔭涼職の動向を追った。従来の研究では、戦国期における蔭涼職の「貴族化」が指摘され、蔭涼職の「虚職」「名誉職」化が強調されてきたが、蔭涼職の人選方法や職務内容の変化そのものの検討が等閑視されてきた嫌いがある。たとえば足利義晴期になると、将軍側近たる内談衆が組織され、五山派禅宗に関する案件にも内談衆が関与するようになり、蔭涼職の職権は低減した。蔭涼職の変容の経緯と内実とは、複雑な政治状況から丁寧に論じるべきこと、明らかだろう。第九章では、戦国期における大徳寺の動向について、対外貿易にも深い関心を有する大内氏との関係から論じた。中央・地方にネットワークを広げる「山隣」派の大徳寺は、戦国期に至り、多くの地域権力の帰依を獲得する。地域権力の側も、大徳寺が有する人脈を有効に活用していた様子が改めて確認された。

終章では、寺院社会における身分制的秩序の再生産が、足利将軍家を中心とする政治秩序の形成にいかに重要な役割を果たしたかという観点で本論の内容を整理する。

その総括の第一点は、公家社会の身分制的秩序が寺院内において再生産されたこと、それにより世俗社会の身分秩序自体が安定的に維持・形成されていったという見通しである。僧に対する儀礼待遇においても、世俗社会における家格や身分に相応しい待遇が求められ、徐々に先例化が進んだ。多方面から身分秩序に関する認識が示され、先例として定着し、その秩序の一般性が担保されたわけである。寺院や公家社会における身分制的差異が明瞭になったことで、世俗・離俗の別に関わらず身分制的秩序が広汎に認知されるようになった。室町期にこそ、天皇を頂点とする身分秩序が安定化したと言えよう。

第二の点は、こうした秩序形成に重大な役割を果たしたのが顕密寺院だけではなく、禅宗寺院も視野に収めねばならない、という主張である。地域権力たる大名層所縁の寺院が十刹・諸山に含まれ、それら五山・十刹の頂点に立つ将軍家所縁の相国寺が五山に列位されていたこと、その塔頭群が足利将軍の菩提所に指定されていた事実に鑑みれば、将軍を頂点とする秩序が、禅宗官寺の社会にも適用されていたこと、明らかである。将軍家に連なるという血統が重視され、平僧でありながら五山長老と同等の待遇を受けている例も見受けられ、これは、まさに「第二の世俗社会」の顕現ともいうべき現象と言えよう。将軍家を中心とする家格秩序が、禅宗寺院にも深く影響していた様相が看て取れる。

そして掉尾においては、将軍家菩提所にとどまらぬ将軍家所縁の諸寺院の探究や、より一層の立体的・構造的な歴史像の構築などが今後の課題として明記される。